

戦時下の文学と「境界」の表象 —太宰治・檀一雄・中村地平の場合

申 福 貞

はじめに

明治維新以後、日本は地理的空間を越え、西洋列強の仲間入りを果たそうとしながら、連帯／侵略を繰り返し、アジアとの接点を持ち続けてきた。「亜細亞洲中、協心同力、以て西洋人の侵凌を防がん」¹⁾と「興亜論」の立場でアジアを語っていた福沢諭吉が、「我国は隣国の開明を待て亜細亜を興すの猶予ある可らず、寧ろ其伍を脱して西洋の文明と進退を共に」せんと²⁾、「脱亜論」を書いたのは朝鮮の甲申政変失敗後のことである。「発展」する「文明」の「西洋」と「停滞」する「野蛮」な「東洋」、このような二項対立の図式的な認識によって日本は、「脱亜入欧」を目指しながら、他者としての西洋を強く意識しつつ、同じ文明圏のアジアをもう一つの他者として自己と差異化していたのである。「極東」がヨーロッパの植民地獲得競争の過程において生み出された概念であるとするならば、そもそも「東アジア」というのも、その自然地理によって規定されたものではなく、そこには「近代」という経験が付与されている歴史的産物なのである³⁾。戦時下において東アジアというのは、支配と服従という関係を維持しつつ、連帯／侵略の関係をもっともよくあらわした磁場として存在していた。そして十五年戦争が続いていた1930・40年代は、日本と東アジアのそうした幾層の関係がもっとも顕著に再現された時期である。戦後、「日本人のアジア観」の中で竹内好は、「大東亜戦争」は「日本の近代化と並行してあった興亜と脱亜のからみあい」の産物であり、「日本にとってアジアの意味が、当初の連帯感から、次第に支配の対象に変わった」と述べている⁴⁾。「興亜論」に見られる連帯には「近代」の暴力が働いているのであり、アジア諸国との摩擦に直面し、それらの緩和の必要性から打ち出された「大東亜共栄圏」は、連帯／侵略の「境界」を抹殺し、その内部から発生するあらゆる差異を覆い隠すことになる。「境界」の制作」という視点から、1930年代の日本思想における環境と主体の関係に注目した中岡成文は、主体、環境、「境界」に触れながら、環境と人間の関係において西田幾多郎の言う「逆限定」とは、「人間は環境には規定されきらず、逆に環境を規定し返す」ものであると指摘し、次のように述べている⁵⁾。

主体は、環境との境界線を自分の側から取り消す身振りを示すことで、主体にまつわる制約(=境界)から原理的に解放された脱主体となる。この脱主体はどこにも境界=制約をもたない無定形の存在であるがゆえに、いかなる境界の内部にも入り込んでいける「無の一般者」である。これはつぎのような政治的理念の対比を連想させないだろうか。すなわち、帝国主義国が自国の境界をたんに膨張させるだけでなく、現地の文化と交渉することによって複雑

な入れ子状態（システム）を呈するのに対し、日本の大東亜共栄圏思想は一あくまでも理念上ではあるが一東アジアの兄弟国に対しては互いの同質性・一体性を強調し、近代国民国家としての境界とそこから来る対外的な暴力をその域内では否認するのである。

ここで指摘されたように、主体と環境のあいだの動的な「境界」形成に着目している西田幾多郎の思考は、〈同質性・一体性〉を強要する「大東亜共栄圏」の理念と通じるものである。アジアと西洋の狭間でさまざまな矛盾と葛藤を抱え込みながら、一方では、西洋に対抗しながらアジアの「解放」を掲げ、他方では、西洋列強とともにアジアを従属させる植民地帝国へと膨張してゆく過程で生み出されたのが、東アジアを〈兄弟国〉とする「東亜共同体」論であり、「大東亜共栄圏」論である。戦時下の日本において「内」／「外」や「自」／「他」の再構成という意味での「境界」の制作という問題が本格的に取り込まれていたのはまさに1930年代であったが、「境界」をめぐる問題が対外においては、アジアへの両義性をはらみつつあった植民地政策と深く結びつけられ、国内においては、対外とのかかわりの中で二項対立の概念を内包しながら現前化されていたのであった。

「満洲事変」とともに文壇に対する弾圧が強化され、プロレタリア文学者による「転向」が行われる一方、「日本主義」と呼ばれる国粹主義の傾向が高まっていく中、太平洋戦争勃発後の1942年には、日本文学報国会が結成され、すべての言論、出版、文化活動は自由を失い、内閣情報局の検閲を受けることになる。「大東亜共栄圏」の理念や「伝統」への回帰といった昂揚する帰属意識の下で、「故郷」と「異郷」、「中心」と「周縁」、「内地」と「外地」、「文明」と「野蛮」など、当時において様々な二項対立の上下価値を付与された概念が、言論活動や思想のレベルで強化されつつあったのである。それは一つの「境界」をめぐる問題でもあり、ある主体の帰属性を問われるものであった。それらの二項対立概念は決して1930年代に特有なものでなく、明治時代の日本の近代化とともに生み出されていたものである。しかし、1930・40年代において「大東亜共栄圏」の理念や「伝統」への回帰といった昂揚する帰属意識の下で、二項対立をめぐる問題が改めて浮かびあがり強化され、再生産されていたのであった。

明治維新以来進められてきた西欧による日本の近代化は、明治20年代に入って強烈な国粹主義の反論を招き、欧化主義と国粹主義の思潮が併存しながら、思想文化上でも伝統の再発見が行われていた。例えば、徳富蘇峰が創設した民友社の雑誌『国民之友』は、明治20年代の日本における平民主義、国民国家主義の指導的なイデオロギーの役を果たしていたもので、その民友社と対峙する政教社の機関誌『日本人』は、政府の欧化主義に抵抗しながら、国粹主義を主張している⁶⁾。明治30年にはいつて、体制順応的一面を内包しつつ、当時の日本国民の心情を先取りしようとする高山樗牛の日本主義は、1930・40年代の日本浪漫派の思想の源流でもある⁷⁾。

文学と思想に見られる二項対立の問題が浮き彫りになり、自発的な国策への順応と「日本への回帰」の昂揚の中、『日本浪漫派』の試みはどのような機能を果たしていたのか。特に本論で取り上げているのは、一面では、「境界」のもつ図式を共有しながら、他方では、それを相対化し、「大東亜共栄圏」理念の素質を照らし出す『青い花』の同人で、『日本浪漫派』のメンバーである太宰治、檀一雄、中村地平などである。『日本浪漫派』との関わりをもっていた太宰治をはじめとするこれらの作家たちは、常に「境界」をめぐる問題をテキストの中に対象化し、問い続けていた。戦時下の言説空間において広く流布していたのが二項対立をめぐる問題であるが、この幅広い射程を一つに纏めあげる可能

性を持つ分析上の概念が「境界」の概念であると考え。ここでは、「境界」という視点から、戦時下の言説空間における「場」と「時」、言語問題等を中心に「帝国」の「外」と「内」にあらわれた「境界」の表象について、東アジアと接点をもつ「境界」という概念から考察可能な、典型的な作家として、太宰治、檀一雄、中村地平を取り上げ、これらの作家たちのアジア体験をもとに、次の視点から考察していく。

(1) 「伝統」／「近代」、「故郷」／「異郷」の表象：

1930・40年代において「日本主義」の昂揚の中、「文化的伝統」への回帰として「故郷」や「郷土」が用いられた。「伝統的故郷」なるものは「日本の血統」に結びつけられ、「故郷」はある主体が帰属する「場」として存在し、「伝統的故郷」を媒介とした日本の文化的伝統や価値に、個人的主体を帰属させようとしていたのが時代の流れであった。

「故郷」がある主体のアイデンティティを想定するような「場」として存在することに対し、体制に協力することも沈黙を守ることなく、文学活動が続けていた人々にとって、「故郷」とは安住性をもたない場であり、それは自己と「伝統」のはざまにおける一つの「境界」として存在していた。〈私達は生まれた国の性格的なものを失ひ個性的なものを失ひ〉、〈故郷を失った文学を抱いた、青春を失った〉青年であると語っていたのが、「故郷を失った文学」を書いた小林秀雄であるが⁸⁾、はやくも「郷土望景詩」の中で「故郷 喪失の怒りと悲しみを訴えたのは、「漂泊者の歌」を書いた萩原朔太郎である。『氷島』の「自序」の中で萩原朔太郎は、〈著者は《永遠の漂泊者》であり、何所に宿るべき家郷も持たない。著者の心の上には常に極地の侘しい曇天があり、魂を切り裂く氷島の風が鳴り叫んで居る〉と、その帰郷の不可能性を提示している⁹⁾。〈家郷に帰った時、既に昔の面影はなく〉、〈昔の記憶をたどりながら、かかる荒廃した土地の隅々から、かつて有った、《日本的なるもの》の実体を探さうとして、当もなく侘しげに徘徊してゐるところの、世にも悲しい漂泊者なのである〉とする萩原朔太郎の「日本への回帰」とは¹⁰⁾、むしろ「回帰」の不可能性を示すものであり、1930年代の日本の言説空間における通俗的な「日本主義」、「国粋主義」に対する批評性をもつものである。「郷土望景詩」の中で「故郷 喪失の怒りと悲しみを訴えていた萩原朔太郎の歌に見られる、「都会」の「近代」性からも「郷土」の「伝統」性からも隔離した場の創出は、まさに「境界」そのものをめぐる問題であり、これは同じ日本浪漫派に属していた太宰治、檀一雄等に見られる問題意識でもある。「放浪」や「故郷」等を描くことによって、広く二項対立をめぐる「境界」の問題を書き続けていたかれらのテキストは、同時代の「故郷」、日本の文化や伝統に対して批評的な価値をもっていたと言える。

檀一雄の「樹々に匂う魚」(『早稲田文学』1937.9)と「裾野少女」(『文芸世紀』1943.8)は、いずれも檀自身の「満洲」地域での数度に亘る放浪と移住の経験と密接な関連を持っている。両小説中に描かれる富士に象徴されるような「故郷」の表象は、一方で「満洲」という空間と対比的に構築されたものである。「樹々に匂う魚」の冒頭にはヒロインあきの出自とともに富士についての記述が見られるが、この富士についての記述は、「樹々に匂う魚」の続編として発表された「裾野少女」にも見られる。「樹々に匂う魚」では、富士に「故郷」が象徴され、あきはその「故郷」にあこがれているが、一方で、「裾野少女」のあきは、「故郷」である富士を離れ、異郷の阿蘇に生きる場を見出そうとする。そこには伝統的「故郷」が否定され、その伝統的「故郷」なるものへの否定は、九州を「故郷」とする唐島の「満洲への旅」によっても表われている。伝統の象徴でもある富士(「中心」)から「周

辺」の阿蘇へ向かうあきの旅は、「周辺」から「中心」に向かう流れと逆行するものでもあり、「満洲」に行ってから音信不通になった唐島の「廃郷の旅」は、伝統的「故郷の喪失」を示すものである¹¹⁾。

「南方」と深いかわりを持つ中村地平は、「旅さきにて」(『行動』1934.5)と「土龍どんもぼっくり」(『日本浪漫派』1937.5)の中で、四年間の植民地台湾での留学生活を結び付けながら、作家自身の創作活動の源とも言われている「南方」へのあこがれと「故郷」へのまなざしを示している。「故郷の発見」と「日本への回帰」という時代の動向の中、「旅さきにて」と「土龍どんもぼっくり」両作品における「外地」から「内地」へ、さらに「内地」の南へという視点の動きは、当時の「日本への回帰」や「故郷の発見」と異質なものである。「旅さきにて」に描かれた「美的内地」は「外地」の悲惨さを浮き彫りにしているものであり、その悲惨さは、「美的内地」に対する違和感を示すものである。「美的内地」を書くことで、「日本への回帰」が否定されているのが「旅さきにて」であるとすれば、「内地」の「南方」という「場」を借りながら近代的合理主義へのアンチテーゼが示されているのが「土龍どんもぼっくり」で、そこにはいわゆる当時の「故郷の発見」とのつながりが見られない。

この「故郷」をめぐる問題は、「土龍どんもぼっくり」の姉妹編と言われる「花子」(初掲誌不明。初収単行本、『熱帯柳の種子』)にも見られる。テキストには都会からの疎外と、同棲していた武田との結婚の話も破綻し、子供を妊娠したまま帰還を余儀なくされた花子がながめていた家郷の様子が次のように書かれている。

赭土の坂をのぼりつめると、突然、視界は幅広く広がって、溪流を挟んだ岸向うの丘や畑の展望が溢れるような太陽をあびて、どっと流れるように花子の眼前へおしよせてきた。坂の頂辺にたった花子は、その眼前の風景に気おされて、その場にたちすくんでしまった。黄色く鈍とした太陽が一面にてりつけている後山も甘蔗畑も、それから蕎麦畑も、辺り一帯は荒廃に荒廃しきって、青黒い雑草の穂が浪のように、ゆれながらうねっていた。そして溪流にそった断崖や、危く懸かって傾いている実家の藁屋根にはペンペン草や箒草が、繁るままに乱れていた。棒立ちになった花子が、呆然として坂の頂辺にたちつくしていると、丈より高い雑草のなかに、踰んでなにか働いているらしい伝吉と定との意外に齢老いた姿が、小さくうごめいて目に映った。

都会の生活に絶望を感じ帰還した花子の目に映っていたのは、荒廃しきった家郷の畑の風景であり、藁屋根の箒草が繁るままに傾いていた実家を背景にあらわれているのは、花子の想像を超えた年老いた両親の姿であった。希望も、生き場も見出せないような花子の心情が語られ、帰郷というものが空虚と閉鎖されたあり方で提示されている。花子と「土龍どんもぼっくり」の稲は、両者とも都会から疎外された人物として造型されているが、この花子と対照的に稲は都会に強くひかれながら〈やまびと〉の世界に留まっている。一方、「土龍どんもぼっくり」では、伝吉夫婦のあり方と伝吉の親子の出自と系譜を描くことによって、「家長」あるいは〈父〉の権威と血統の正統性への否定が示されている。保田與重郎が、〈個人の郷土〉と〈民族としてもつ郷土〉という二つの〈郷土〉概念を提出することによって、自らの生地である現実の郷土の大和を、理念上の郷土としての大和へと融和させ、神話的トポスとしての大和を創出し、〈日本の血統〉に結びつけていたとするならば¹²⁾、中村地平はいわゆる血統の正統性をもたない伝吉一家を描くことによって、郷土である「南方」(九州)を

あえてそういった文化的伝統をもつ〈郷土〉と相反するものとして、伝統の解体を試みていたのである。

(2) 「内地」／「外地」、「中央」／「周辺」の表象：

日清戦争以来、政府の計画的な移民政策で植民地への進出人口は確実に増えていたが、「満洲事変」以後は「海外雄飛」というスローガンのもとで、多くの日本人が「開拓」民として「外地」に移住していた。「外地」という言葉もこの時期から頻繁に用いられ、「北へ行こう。北へそして広野へ」という言葉が、時代の合い言葉のようなものとなり、一方で、日清戦争以来、台湾を南進基地と位置付けようとする認識が、1930年代の日本において再び登場していたのである。このような時代の流れの中、「満洲」を放浪しながら「故郷の喪失」を語ったのが檀一雄であり、植民地台湾を介しての「南方」へのあこがれを表していたのは中村地平であったが、彼らにとって、「伝統回帰」の昂揚の中、「故郷」というものは一つの「境界」であり、植民地も一つの「境界」として存在する「場」であった。「内地」と「外地」を一体化する「内鮮一体」、「内台一体」の植民地政策が、領土的文化的「境界」を越え、「自」と「他」の差異を「仮構された共同体」の内部に封じ込めようとすることに対しての違和感を、これらの作家たちは、自ら「外地」を経験することによって語っていたのである。

中村地平における「境界」の意識特に「内地」と「外地」の問題は、実際1930年10月に起きた「霧社事件」を題材とした「霧の蕃社」（『文学界』1939.12）にも顕著にあらわれている。巡查として霧社分署に勤務している花岡一郎と二郎は兄弟ではなく、その名前は、一郎が「蕃人」として初めて台中師範学校を卒業し、その異例の二番目として二郎が卒業したということで付けられたものである。花岡一郎と二郎という名前は、植民地統制の権力機関である警察署に勤めている二人が、如何に「日本人」としての役割を果すことを期待されていたかを物語っている。テキストには、〈自分に血液の同じ種族への同族的な愛情と、恩愛のある内地人への義理は、二つのものの板ばさみになって苦慮し、〈蕃人と、内地人と、何れの側にもたつことのできない苦悩をいただいた〉一郎と二郎の板ばさみの苦悩が描かれている。事件の発生後、花岡一郎家族が縊死したことに對し、花岡一郎だけが切腹したことについて次のように書かれている。

討伐隊は彼らの屍体を前にして暗澹とした面もちでつぶやいた。／「あれだけ可愛がったのに……。結局は蕃人であった。自分たちと行を共にすることをしなかった」しかし、他のものはそれをさえぎるように答えた。／「けれども、一郎が割腹して果てたのは、なんといても教育の賜ではないか」いったい蕃人の自殺といえ、すべて以前は縊死によるばかりであった。切腹の形式をとったのは蕃地では花岡一郎が最初だったのである。

「日本人」として生きることを期待されていた花岡一郎が、〈切腹〉という「日本人」らしい死を遂げていることに對し、討伐隊は一郎の〈切腹〉が〈教育の賜〉であるとつぶやく。だが、「日本精神」に殉じるという花岡一郎の〈切腹〉は、あくまでも一人の「蕃人」として自らの民族のための死であり、決して「日本人」として「日本」という「国に身を捧げ」た行為ではない。帝国と「蕃人」のはざままで生きて来た花岡一郎の生そのものが「境界」の問題をあらわすものである。民族のための一郎の〈切腹〉が、結局〈教育の賜〉を裏切るようなものであり、〈結局は蕃人〉であったという言葉は、「蕃

人」における「日本精神」の〈教育〉の敗北を意味していることを、中村は花岡一郎の〈切腹〉を通じて語ろうとしていたのではないだろうか。「霧社事件」が起きてからおよそ10年という年月が経って発表された「霧の蕃社」には、花岡一郎をはじめとする「日本人」の「境界」をめぐる問題が一つの重要なテーマとして書き込まれている。

太宰治の場合は『惜別』（朝日新聞社1945.9）という作品の中で、中国近代文学の先駆者である魯迅を、その弟の周作人を補助線として描き、「他者」（アジア）という〈鏡〉に映る「自己」（日本）像を浮かびあがらせている。日本人女性と結婚し、日本の文化に興味をもち、日本通でもあった周作人は、帰国後の1920年代において日本に対する批判を行っていたが、日中戦争の勃発後には日本文化を賛美する文章を書き続け、やがて日本の傀儡政権の要職に就任したことより、戦後の中国においては「漢奸」として断罪される。周作人の一生は日中の狭間でゆれ続けた一生なのである。周知の通り周作人の「自己譴責」は、つねに日本の伝統文化が参照となっていたが、周作人を補助線として、「他者」という〈鏡〉によって映し出された「自己」（日本）とは、まさに「他者」の「他者性」を失った戦時下の日本そのものではなかっただろうか。その「他者性」の喪失が、地理的、文化的な「境界」を越えた統合の暴力によるものであることはいままでもない。『惜別』に見られる〈日本語不自由組〉という設定は、戦時下における「内地」の統合政策と「外地」の日本語のあり方をはじめとする文化政策を表すものである。そもそも太宰が「日本語不自由組」という言葉を用いたとき、そこには、「国民」と「非国民」、そして「内」と「外」における「日本人」という「境界」の問題が、帝国の「内」と「外」に同時に発生しているという現状に対する太宰の認識がうかがえる。『津軽』の結末の〈絶望するな〉という「私」の読者への呼びかけは、あたかも「大東亜共栄圏」によるアジアの〈連帯〉の破断という日本の運命を象徴するかのようには語られている。

旅の形式で書かれた『津軽』には（小山書店1944.11）、チェーホフの『シベリヤの旅』（神西清・訳岩波書店1934）の影響が見られる。中央のモスクワからシベリヤ地方へ向かうチェーホフの旅はヨーロッパからアジアへの旅であり、そこには「文明」と「野蛮」に対する作家自身の眼差しが、ヨーロッパの文明国より遅れて近代化を進めたロシアの、ヨーロッパと近隣の中央アジア諸国への眼差しとは異なるものとして提示されている。ロシアのこのような眼差しは、まさに日本の近代化にあらわれた日本の西洋と東洋に対する眼差しと重なるものでもある。『津軽』に書かれた「私」の故郷への旅が「満洲」を想起させるものとして書かれており、故郷を語ることによって「満洲」が相対化され、「私」の故郷である津軽（地方）と日本（中央）、そして「内」（日本）と「外」（アジア）の構図が、「私」の故郷への旅によって語られている。太宰治の『津軽』と中村地平の『日向』はともに小山書店の依頼を受けて書かれた作品で、同じ時期に新風土記叢書として出版されている。それぞれ日本の北と南に向かって「中央」に距離を置きながら自らの故郷について語っていたが、時代に乗り遅れる人々を描いたという点においては通じるものがある。

(3) 「母語」／「非母語」、「日本語」／「非日本語」の表象：

「内地」であらわれた「境界」をめぐる問題は、「外地」の「日本人」が抱えていた問題でもあり、日本語は、それを母語としていない人々と共通する唯一の言語として使われていた。「外地」の「日本人」が母国語と日本語の間で自分の民族のアイデンティティを探ろうと、あえて日本語を用いて文学活動を行っていたとするならば、かれらにとって日本語も一つの「境界」の問題を想起させるもの

として存在していたと考えられる。このように「外地」の「日本人」の「境界」についての認識には、日本語を唯一の言語として「境界」を彷徨う「内地」の表現者と通じるものがあつたと言える。

内外の境界線である明治維新から百年の間、侵略や戦争によって日本の地理的な境界は大きく変化し、それにともなって「興亜」と「脱亜」、「内地」と「外地」、「近代」と「伝統」など様々な概念が生み出されてきた。一般的に国語は対内的な概念であり、日本語は対外的な概念であると解釈されることが多いが、日本語に対しての国語という言葉も、日本の国民国家の形成と帝国形成の二つの過程が重なり合いながら進行していったなかであらわれた概念である¹³⁾。フェイ・ユエン・クリーマンは、〈日本文学〉が、日本人によって日本語を用いて書かれた文学で、市民権を得、安定的、連続的な、世界中の殆どの国民国家に共有される国民文学の概念として定義されるとすれば、他方の「日本語文学」は、日本文学の確立した定義を揺るがす、新しい、既存の型にはまらない文学分野である〉としながら次のように述べている¹⁴⁾。

「日本語」が一九三〇年代までにすでに確立された用語であつたのと異なり、カテゴリーとしての「日本語文学」は、たとえば「外地文学」や「旧植民地文学」のような古い用語に取って代わるため、近年になって作り出されたものである。これら古い用語が文学の生産された場所を示す一方、「日本語文学」は作品の表現媒体である言語を強調する。

フェイ・ユエン・クリーマンは、「日本語文学」が「日本文学」に含まれない要素を内包し、「日本語文学」には使用されている言語、そして「外地文学」や「旧植民地文学」には空間性が強調されていると指摘する。戦時下の「外地文学」あるいは「旧植民地文学」の創出された場が「内地」ではない「外地」であるとするならば、当然ながらそこには植民地出身や占領地域の作家たちが含まれるし、「外地」での「内地」人の文学活動も含まれている。1930・40年代の日本の文壇において「外地」と「内地」が相互作用していたことは、「外地」出身の作家たちの「内地」での活動や、「内地」の作家たちが「外地」とかかわっている人物や事件を題材として扱っていたことから容易に理解することができる。国家と民族を裏切るいわゆる「親日派」の扱いを受けていた朝鮮人作家である張赫宙は、本名の張恩重と創氏名の野口稔をもち、朝鮮語と日本語で小説を書いていたが、植民地期に朝鮮人が日本語で書くことについて南富鎮は、〈たんに親日的な心情からでも、日本語の強要によるものだけでなく〉、〈日本語に向かう文学的動機と日本語表現への欲望がもたらす自然な帰結点でもあつたといえる〉と指摘し、張赫宙の文学について次のように述べている。

張赫宙の朝鮮はあくまでも日本近代文学(日本語)の思想性によって反射された朝鮮であつて、朝鮮近代文学(朝鮮語)によって反射された朝鮮ではない。そのため、張赫宙が日本語で朝鮮をリアルに描けば描くほど、その相克と間隙はますますひろがってしまう。そしてその深淵には植民地言語と帝国言語がもつ近代思想性の問題が存在している。張赫宙文学の到達点はこうした近代と言語における帝国と植民地の狭間に存在していたといえる。

南富鎮は、「仁王洞時代」(『仁王洞時代』河出書房1935)の分析を通じて、張赫宙の文学に見られる特徴を指摘しているが、宗主国の言語を用いて語ることが、宗主国の思想に照らされた朝鮮を書く

結果となり、それは帝国と植民地の言語の持つ思想性に帰結すると言う。植民地における日本語を用いた朝鮮人作家たちの文学活動が、日本語表現への欲望に駆られてはいるものの、このような欲望の背後には、作家自らが進んで日本語を選ぶような言語的社会的措置が働いていたのである¹⁵⁾。このような自発性は単なる作家において存在するものではなく、日本の植民地政策全般に関わるものでもある。酒井直樹は「日本人であること」の中で、植民地主義が維持されたのは、下位に置かれ差別された植民地の人々が、それにもかかわらず宗主国民のようになりたいという欲望を持ち続けるような機制が機能していたからと指摘し、田辺元の「種の論理」は、まさにそのような帝国理論を体現していると述べている¹⁶⁾。

一九三〇年代末から四〇年代にかけて発表された本島人作家による「国語」文学を日本植民地主義への単なる迎合として看過することもできないのである。というのは、ここには植民地の個人と日本の国家への想像的な関係が見事に表現されており、この関係こそが「種の論理」によって主題的に問題化されたものだからである。さらに、「種の論理」が、このように抵抗のマイノリティ知識人の自己正当化の論理を強くささえるものとして、彼等の日々の欲望を組織してゆく点を忘れてはならないだろう。／というのも、特に植民地の知識人にとって、日本の国民共同体への帰属についての関心は、出自による即時的な帰属原理と出自を超えた理念的な共同性の間を振動せざるを得ないからである。しかし、この差別を乗り越え、社会的な変化に参加させることによってしか、彼等から自発的な帰属の意志を引き出すことはできないと考えられている。

酒井は、戦時下の台湾人知識人の中でもっとも皇民化政策に迎合的と言われる作家である陳火泉の『道』をとりあげ、作品のなかに描かれた主人公たちに見られる、自らの出自を超えた理念的共同体への帰属意識は、まさに帝国主義的国民主義の誘惑によるものであると指摘している。作品『道』に描かれたそのような人物像はまさに作家自身の立場を表わしたものと言えよう。また、田辺元の1934年5月19日に京都大学で行われた「死生」と題された講演は、「国に身を捧げる」ための個の国家への忠誠を促すもので、日本政府の政策との結び付きを最も象徴的に伝えるものであるが、〈人（個）は国（種）と対決することによって神（類）へ関わる〉とする田辺の「種の論理」が、結果的に「国に身を捧げる」よう促すことに繋がることになったと酒井は言う¹⁷⁾。「個」と「種」の否定関係により「類」へと帰属しようとするとき、「種」のあいだに生じた葛藤や矛盾は克服しなければならないこととなり、その葛藤を乗り越えようとすることによって、国家間民族間の差異は隠蔽されてしまうのである。「個」の国家に対する絶対的な崇敬や自己犠牲を強いる理論となった「種の論理」は、台湾や朝鮮など植民地のマイノリティを理念化された共同体へ誘惑することにより、民族の間の「境界」を越え、そこから生じた矛盾を抹殺することになる。

ここで戦時下の日本語及び日本語文学の問題を、植民地作家の日本語表現を中心に、これらの作家たちの〈日本語に向かう文学的動機と日本語表現への欲望〉が、単なる親日的感情からでもなく、また、日本語の強要によるものだけでもないことを、当時の植民地政策に照らしながら分析した。〈日本語表現への欲望〉に駆られながらも、植民地民衆の悲惨な生活を世界に知らせたい、あるいは朝鮮の文化や生活や人々を「内地」の読者に伝えたいとする「外地」の表現者にとって、言語はまさに宗

主国と植民地の間に存在する一つの「境界」の問題でもあり、これらの作家たちは、日本語を通して植民地宗主国と被植民地のあいだで翻弄されつつあった植民地の人々の生の営みを描くことを試みていたのである。

終わりに

戦時下において「伝統」や「故郷」「家郷」をめぐる言説は、同時代状況と関連しながら多様な領域において言説化されているが、この時期の『日本浪漫派』の表現活動と密接なかかわりがあることは言うまでもない。戦時下において『日本浪漫派』をどう考えるかというのは、様々な問題系を喚起しているが、大久保典夫は、『日本浪漫派』が徐州開戦以後に確立した保田與重郎の批評フィールドによって、その性格が誤解されていたことは十分考えられるが、創刊当時は〈純粹に文学であることによってその独立な位置〉を誇っていたと、評価したうえで次のように述べている¹⁸⁾。

少なくとも、保田與重郎・中谷孝雄・亀井勝一郎・神保光太郎など創刊に加わった同人諸氏には、昭和初頭以来文壇を席捲したプロレタリア文学といわゆるモダニズム文学の文学としての浅薄さがよく見えていたのであり、それはそのまま皮相な都会の消費文化と気脈を通ずるものであった。彼等は何よりもかかる軽佻浮薄な日本的近代にたいして反撥したのだが、ほかならぬ彼等自身が既に都市生活者として「故郷」へ帰りえぬゆえに、その表現は鬱屈して苦渋の表情を帯びざるを得なかったのである。

ドイツロマン派の詩人ノヴェリスの小説「青い花」は、「コギト」に第25号より田中克己によって翻訳連載が始められ、「日本浪漫派広告」が掲載された第30号（独逸浪漫派特輯）が巻末となった。保田與重郎のドイツ浪漫派への傾倒の裏側には、このようなプロレタリア文学と〈現状反抗を強いられた者〉（「日本浪漫派広告」）達の時代に対する違和感があったのである。

太宰治、檀一雄、中村地平は、ほぼ同じ時期に帝国大学に入学し、その後の『青い花』の発刊、『日本浪漫派』への合流という道とともに歩んでいたが、「故郷」の喪失や「日本的なもの」への回帰という時代の動向の中、彼らのテキストに描かれた「故郷」は、その時代に回収されないものと見られる。三者における「内」と「外」、「自」と「他」の間で生まれてきたこれらの問題意識は、アジアの連帯を強調しながら、領土的、あるいは文化的な「境界」をたえず「外」へと拡張することによって、自己の膨張を図る日本を頂点とした「大東亜共栄圏」の理念と距離をおきつつ、形成された思考によるものである。檀一雄と中村地平は、それぞれ「満洲」と植民地台湾で「外地」を経験することによって、その時代における「境界」の問題意識を作品に描き込んでいたが、「外地」の経験を有しない太宰は「内地」にとどまりながら「外地」に語りかけていたのであった。三者におけるアジア体験は、「内」と「外」、「北」と「南」あるいは「中央」と「周辺」という、それぞれ異なる「場」に由来するものではあるものの、当時において多くの日本語作家に共有されていたものだと考えられる。「内地」で日本語による創作活動を続けていた「外地」の表現者にとっては、宗主と隷属という構造そのものが「境界」の問題を内包しているものであり、「境界」というものはつねに彼らに付き纏う問題でもあった。

そもそも、「境界」の問題は、近代固有の問題ではなく、近代以前にも存在しており、明治維新以後、

日本の近代化とともに強化され、戦前、戦中、そして戦後にも一貫している。従って作品分析においても共時的な視点と、通時的な視点から深める必要がある。戦時下における作家たちの表現活動は、同時代の思想の流れと無関係に行われていたのではない。このような意味で本論文では、西田幾多郎や田辺元の哲学の視点からも触れてはいるものの、分析までには届かず、思想の文脈でも検討を精緻化する必要がある。日本の近代化が東アジア諸国の近代化と深く関わっていただけに、「境界」をめぐる問題は、国内にとどまらず、「内」と「外」の問題と絡み合いながら、同時に発生していたのである。日本の「外」側での表現活動についてはやや触れたが、これらの作家たちの表現活動について取り上げることはできなかった。帝国と植民地の間で生じた苦悩は植民地の作家のみならず、占領地の中国においても同じく存在しているものである。多岐にわたる「境界」の表象が、近年「外地」の日本語文学研究においても注目される中、戦時下の東アジアという時空間における日本語文学を考察するにあたって「境界」という概念がもつ意味と射程は極めて重要であると言えるのである。

【注】

- 1) 福沢諭吉「朝鮮の交際を論ず」(『時事新報』1882年3月11日), 『福沢諭吉選集』第7巻, 岩波書店, 1981年, pp126-129.
- 2) 福沢諭吉「脱亜論」(『時事新報』1885年3月16日) 『福沢諭吉選集』第7巻, 岩波書店, 1981年, pp221-224.
- 3) 丸川哲史『東アジア論』, 人文書院, 2010年, pp5-6.
- 4) 竹内好「日本人のアジア観」『竹内好全集』第5巻, 筑摩書房, 1981年, pp115-133.
- 5) 中岡成文「〈境界〉の制作—三〇年代思想への接近—」『思想』, 1997年12月, pp49-67.
- 6) 荻久保泰幸「日本浪漫派と日本主義文学の勃興の素地」『解釈と鑑賞』, 2002年5月, pp56-61.
- 7) 山田博光「高山樗牛」『明治の文学』, 有斐閣, 1972年, pp134-135.
- 8) 小林秀雄「故郷を失った文学」『小林秀雄全集』第3巻, 新潮社, 1968年, pp29-37.
- 9) 萩原朔太郎「自序」『氷島』『萩原朔太郎全集』第2巻, 筑摩書房, 1976年, pp103-104.
- 10) 萩原朔太郎「日本への回帰」『萩原朔太郎全集』第10巻, 筑摩書房, 1976年, pp458-489.
- 11) 本論でふれた太宰治の『惜別』『津軽』、檀一雄の「樹々に匂う魚」「裾野少女」、中村地平の「旅先にて」「土龍どもぼっくり」などの作品に関する分析は、それぞれ拙論—「檀一雄『樹々に匂う魚』『裾野少女』論」(『熊本大学社会文化研究』8, 2010年, pp189-203); 「中村地平における『外地』/『内地』の表層:『旅先にて』『土龍どもぼっくり』」(『熊本大学社会文化研究』9, 2011年, pp 233-247); 太宰治『惜別』論: 周作人『瓜豆集』との関連性をめぐって」(『近代文学論集』36, 2010年, pp 96-113); 「越境」する旅—太宰治『津軽』を視座として」(『国語国文学研究』47, 2012年, pp 63-79) を参照したものである。
- 12) 坂元昌樹「保田與重郎と〈差異〉—幻想としての〈郷土〉」『近代文学研究』19, 2002年, pp68-80.
- 13) 山口守「植民地・占領地の日本語文学」『「帝国」日本の学知』第5巻, 岩波書店, 2006年, pp10-60.
- 14) フェイ・ユエン・クリーマン「戦後の日本語文学」末岡麻衣子・訳『「帝国」日本の学知』第5巻,

岩波書店, 2006年, pp112-119.

- 15) 南富鎮「張赫宙論」『〈外地〉日本語文学論』, 世界思想社, 2007年, pp79-92.
- 16) 酒井直樹「日本人であること」『思想』, 1997年12月, pp5-48.
- 17) 注(16) に同じ.
- 18) 大久保典夫「日本浪漫派の初心」『日本浪漫派とはなにかー復刻版「日本浪漫派」別冊一』, 雄松堂書, 1972年, pp9-13.

Literature in the war years and features of the “boundary” issues

— Cases of Dazai Osamu, Dan Kazuo and Nakamura Chihei

Shen Fuzhen

After the Manchurian Incident, the Japanese government strengthened its rule over the literary world. All speeches, publications and cultural activities had lost freedom and were censored by the Intelligence Agency of the cabinet. In the concept of “The Greater East Asia Co-Prosperity Sphere” and the idea of return to the tradition, such opposing concepts, like “homeland” and “strangeland”, “center” and “surroundings”, “Japanese” and “its oversea territories”, “civilized” and “barbarous”, were combined with the notion of superior and subordinate relationship, and begun to spread in the realm of speech and thought. These widely-circulated concepts of the war years were not products of the 1930s and 1940s, but were formed gradually under the modernization of Japan since the Meiji Restoration. Such concepts are mainly connected with the “boundary” issues. Taking Dazai Osamu, Dan Kazuo and Nakamura Chihei as the analytical objects, this paper examines the “boundary” issues during the war years through the writers’ experiences in Asia.